

## 大阪府立港南造形高校 講演会および連携授業レポート

### 【講演会】

講演日：2009年7月9日

場 所：大阪府立港南造形高校

受講者：港南造形高校生・教員 計約80名

講 師：福のり子（京都造形芸術大学 ASP 学科教授）

#### 概要：

大阪府立港南造形高校にて、アートとコミュニケーションをテーマに講演を行った。本講演は、後に述べる11月からの連携授業に向けた準備講演でもある。主な受講者が、美術を専攻し自らも作品制作を行っている高校生ということもあり、制作と鑑賞の関係や、日常との重なりを手がかりに、アートやコミュニケーションにおける受け手の重要性や、ひとつの答えがないことによって多様な解釈や価値観が生まれることの大切さ、自分とは異なる価値観を持つ他者とのコミュニケーションが大事であること、そしてこれらすべてを含んだアートという現象の魅力を語った。講演後、学生への反響も大きく、好評であったとお声を頂いた。

### 【連携授業】

授業実施日：2009年11月18日、25日、2010年1月13日、16日

場 所：大阪府立港南造形高校

受講者：港南造形高校2年生1クラス

担当講師：和田周子（港南造形高校教員）

伊達隆洋（京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター研究員）

#### カリキュラム：

- 1回目 11/18 対話の練習「聴く、応答する」ワークショップ（伊達）
- 2回目 11/25 作品をみて言葉にする。「みる・伝える」ワークショップ（伊達）
- 3回目 12/2 対話による作品鑑賞を体験してみる（和田）
- 4回目 12/16 受講生がナビゲートする作品選び（和田）
- 5回目 1/13 受講生による模擬ナビゲーションと講評（伊達）
- 6回目 1/20 受講生による模擬ナビゲーションと講評（伊達）

- 7 回目 1/27 受講生がナビゲイターを務める対話型作品鑑賞（和田）
- 8 回目 2/3 受講生がナビゲイターを務める対話型作品鑑賞（和田）
- 9 回目 2/10 受講生がナビゲイターを務める対話型作品鑑賞（和田）

#### **概要：**

港南造形高校の美学美術史演習の授業にて、対話型鑑賞に関する連携授業を行った。本授業では、美術史学習の一環として対話型の鑑賞を取り入れており、後期の最後には生徒自身がナビゲイターを務めて対話型鑑賞を行うことがカリキュラムとして組み込まれている。今年度は兵庫県立美術館とも協力し、受講生は同館にて、実際に展示中の作品をナビゲイションすることとなった。今回の連携授業では、この美術館での鑑賞に向け、受講生がナビゲイションを行うためのトレーニングプログラムの提案・実施という形で、本学アート・コミュニケーション研究センターが協力を行った。

#### **実施：**

最初の授業では、グループでの鑑賞を行う準備段階として、1対1での会話をういたコミュニケーション・ワークショップを行った。これは、今後、対話型の鑑賞をナビゲイションするにあたり、聞き手の応答の重要性と、能動的な対話の必要性を意識付けるためのものである。受講生からは「普段の会話は、相手の言っていることをわかったつもりになっているだけだった」、「どうやったら相手に伝わるかを考えて、もっと相手にわかってもらえるように伝える工夫が必要だと思った」、「相手に整理して返してもらえることで、自分の考えがまとまっていった」等の感想が聞かれた。

第2回では、アート作品を言葉で記述するワークショップを行った。対話型の鑑賞を行うには、作品をただ見るだけでなく、それを言葉にして相手に伝えることが必要となる。そのため、作品にみえたこと、感じたことを言葉で記述することに加え、具体的な相手を想定し、その相手に言葉のみで作品を伝えるワークを行い、互いに読み合わせを行った。同じものを見ていながらも、それぞれの受け取り方の違いや、表現方法の違いが生じることへの気づきが受講生の感想に多く聞かれた。

伊達による前半の2回のワークショップは、ACOPの基礎となる「みる、考える、話す、聞く」という4つの要素を意識付けるためのワークショップであり、受講生にはそれぞれに、対話と鑑賞につながる気づきが生じたという手応えを得た。

第5・6回では、生徒が自分の選んだ作品の画像でナビゲイションを行い、鑑賞後、美術館での鑑賞に向けてナビゲイションの実際的な講評を行った。

#### **今後に向けて：**

今回の連携授業は本学で行われているACOP実践とは異なり、受講生である高校生たち

の準備期間が短いものとなった。今後、本格的なナビゲーションのトレーニングを学校教育のカリキュラムで行うには、より長期のプログラムを検討する必要があるといえる。今回に限れば、対話型鑑賞をまず実際に体験し、意識をもって鑑賞する姿勢を養うこと、そして、他者と一緒に作品を味わう面白さを感じてもらうことを第一とした。こうした体験が、ひいては自分とは違う価値観に触れることへの興味をより引き出せるものになるにはどのようなプログラムが可能か、さらなる検討が必要である。

### 大阪府立港南造形高等学校・和田周子先生より

本校は1学年200名、全校600名あまりの生徒全員が、造形芸術を学んでいる専門高校です。今回、連携授業を実施させて頂いたのは、2年生専門選択科目のひとつで「美学美術史演習」ですが、そのベースには2年生必修科目の「造形史」があります。

「造形史」は聞き慣れない言葉ですが、本校独自の科目で、1週間にたった1回(50分)ですので、主に日本と西洋の美術史に薄く広く出会うことをねらいにしています。本校生はここで、1学期に日本の古典美術や伝統工芸が、身近なアートであるマンガやデザインとの密接な結びつきについて知り、2学期には西洋美術の大きな謎、抽象画や現代美術がいかに現れてきたのかについて、印象派から学んでいくことになります。ここで生徒達は年間5回レポート課されますが、そうしたなかから自分の価値観の曖昧さに気付き、考えることを求められます。

全員がこういったベースを持つなか、2年生で更に美術との対話を深めていきたいという生徒が、「美学美術史演習」を選択しています。この授業は、1期生で開講、途中中断し5期生で復活した授業です。当初の年間計画は、「造形史」をステップアップさせる意味から、そのスタイルを踏襲し、1学期では日本美術史、2学期では西洋美術史、3学期に展覧会企画をたてると言う内容でした。

昨年5期生で再スタートすることになり、まだまだ内容を検討していく必要があると感じていたところ、偶然、大阪府教育センターで行われた福教授の対話型鑑賞講習会に参加したことで、常々本校生徒に決定的に足りていないと感じていた「話す、伝える、聞く」を補い、更にそれ以上の効果が期待できると考え、早速、(かなり無謀でしたが)2学期後半から取り組むことにしました。既に2学期の前半に、生徒達は西洋美術史の1つの時代について調べ、模擬授業する課題を課されていたため、人前で話すことには慣れていました。しかし、更に自由に作品自体を見て会話して行けるようになるため、10月に学外演習で鑑賞した「アール・ブリュット展(滋賀県立近代美術館)」の作品画像を、映写し意見を出し合い、なぜそう見えたり感じたり、考えたりしたかを深く突き詰めていきました。更に私のナビゲーションでの作品鑑賞を経験し、最終的には兵庫県立美術館のコレクション展から作品を1人1点選択、ナビゲーター体験をおこないました。結果、生徒達は事前に作品

や作家について調べたことを話しすぎ、鑑賞している仲間の意見をうまく引き出せない、会話になっていかない生徒が多く見られました。初めての試みの中で、生徒達はどん欲に学び、成長してくれましたが、課題内容として更に検討を要することは明らかでした。

そして、今年、本当にありがたいことに申し入れを受けて頂き、連携授業が実現しました。全9回のうちの導入部2回、模擬ナビゲート体験2回を伊達先生が担当していただいたことで、通常の授業にはない緊張感と特別感があり、そのため生徒達の好奇心、向学心が十分に刺激されたようです。やはり、本物に触れることは、こういう場合に置いても、必要なことだとなつくづく思い知らされましたし、私自身の授業研究にもなりました。

現在、2回6人の生徒が兵庫県立美術館でナビゲーターを務め鑑賞を終了しましたが、つたないながらもメンバーの意見を聞き出し、理解し、共有しようと健闘しています。また美術館での1回ごとの振り返りでは、「見ていき、人の意見を聞いていくうち、どんどん見え方感じ方が変わって行く様子に驚いた」「わくわくした」「自分と同じ所を見ている、違う感じ方をしたり、考え方をする可能性があることに気付いた」等の意見や、作家の内面や、描かれた背景にまで深く入り込んでいくような意見も聞かれました。ナビゲーターを経験した生徒からは「用意するのではなく、その場で人の言葉をしっかり聞くことが大切だと気付いた」というコメントがありコミュニケーションの本質に気付かんとしている兆しがあります。更に「油絵を描くとき、デッサンをする時、立体に触れる時、この授業を思い出す。ものを創るのも、見るのも、考えるのも創作活動に値する・・・それについて語り合うのもまた同様なのだ」などと相当に深く自分の制作活動との関係を考えはじめた生徒や、ナビゲーションが思ったように上手くいかなかった生徒でも、「不本意な形で終わった。後味が悪かった。」と言いつつも「その時納得いかなくとも、その不満や憎悪が次へ繋がる架け橋になるかも知れない。」と負の結果からも何かを得ようと言うどん欲さも見られ、相当に手応えを感じています。

それにしても、絶対的に鑑賞者としての体験が少なく、本校の生徒達だけでは、似た年頃、似た趣味趣向のため、見え方の広がりや厚みが無く限界を感じます。そんななか、今回数回、本校卒業生で現在ASP学科1年学生を同行させて頂いたのですが、年頃は近いが世界が広がりつつある、今まさに成長していく途中の彼女の存在がかなり有効に働いていたように感じました。そこで、更に例えば京都造形大学の学生の中に入って、ACOPを経験したりするような機会があれば、より深く上質な学びになるのではと考えています。これからも是非、内容をより良いものに検討しながら継続的にお願いしたいものです